

当日の入場方法

- すべての上映 / トークショーは入場無料です。
- 各日 12:30 より、会場にて整理券を配布します。
開場時間（上映 10 分前）になりましたら、整理券の番号順にご入場いただきます。
- 満席の場合にはご入場をおことわりする場合があります。

会場

筑波大学

体芸 5C 棟 216 教室

〒305-8574

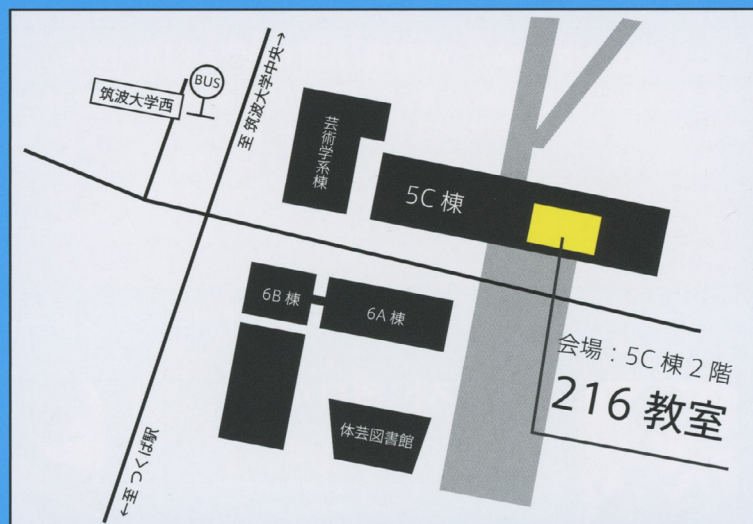
茨城県つくば市天王台 1-1-1

筑波大学 体芸 5C 棟 216 教室

※車でのご来場はご遠慮ください。

つくば駅バスターミナルの6番乗り場より、先行が「筑波大学中央」もしくは、「筑波大学循環（右回り）」のバスに乗り、「筑波大学西」停留所で下車してください。

つくば駅からの所要時間約10分。



告知

福島原発事故から2年、
福島の人々の声を取り出し世界に届けるプロジェクトもスタートします！

筑波大学 +UPLINK 合同プロジェクト

FUKUSHIMA VOICE

いま、福島の人々は何を感じ、考えているのか。

原発事故から2年後の福島に生きる人たちの声を記録し、伝えようとするプロジェクト「FUKUSHIMA VOICE」が発足！
本プロジェクトでは、有志の筑波大生13名が、数多くの映画制作に携わってきたプロデューサーたちと一緒に、ドキュメンタリー映画を制作します。完成した映画は、国内はもとより、世界の映画祭で上映し、インターネットを通じて発信する予定です。

■プロデューサー：浅井隆（あさい・たかし）

1955 年大阪生まれ。映画配給・映画製作・出版・イベントスペース運営・レストラン運営を行う UPLINK の社長。ウェブマガジン「webDICE」編集長。近年の配給映画作品に『モンサントの不自然な食作物』『ヴィダル・サスーン』『イグジット・スルー・ザ・ギフトショップ』『アンヴィル！夢を諦めきれない男たち』など。これまでの製作映画に『アカリイミライ』『愛の悪魔 / フランシス・ペイコンの歪んだ肖像』『ふたりの人魚』など。

www.uplink.co.jp

■ラインプロデューサー：大澤一生（おおさわ・かずお）

1975 年、東京都出身。日本映画学校映像ジャーナルゼミでドキュメンタリー制作を学び、卒業後は独立系ドキュメンタリー映画の制作に主にプロデューサーとして携わる。主な参加作品に『バックドロップ・クルディスタン』（2007 年・野本大監督）、『アヒルの子』（2010 年・小野さやか監督）、『LINE』（2010 年・小谷忠典監督）、『9月11日』（2010 年・大宮浩一監督）、『隣人』（2012 年・刀川和也監督）など。『ドキュメンタリー映画100万回生きたねこ』（2012 年・小谷忠典監督）が12月8日よりシアター・イメージフォーラムで公開。

お問い合わせ

筑波大学創造的復興プロジェクト室
TEL 029-853-2813 担当：窪田、片岡、澤田

<http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~cr/>



© 2011 「長岡映画」製作委員会 PSC 配給/TME PSC

筑波大学+UPLINK合同プロジェクト FUKUSHIMA VOICE 関連企画

特集上映

AFTER 3.11

2013

2/16(土) — 2/17(日) 会場：筑波大学 体芸 5C 棟 216 教室

音と声

AFTER 3.11

音と声

2/16 (土)

13:00～

『この空の花 -長岡花火物語-』

監督:大林宣彦 (2011年/160分/日本)



©2011「長岡映画」製作委員会 PSC 配給/TME PSC

伝説の花火師、放浪の画家・山下清、過去から来た謎の女子高生、現在をすれ違う恋人たち、そして未来を生きる子どもたち——。
市井の人々の“勇気と祈り”で平和を作り、何度でも蘇り復興を遂げてきた町、長岡。
ほとんどの登場人物は歴史の中の実在の人物たちであり、歴史的事実を革新的なセミドキュメンタリータッチの劇映画として綴る。
いま、ひとつの、とてつもなく壮大な物語世界<ワンダーランド>の花が夜空に咲く!!

16:00～

『音のない3.11～被災地にろう者もいた～』

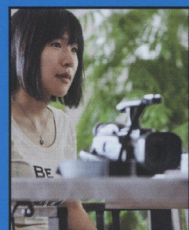
取材・撮影・編集:今村彩子、渋川和憲 (2011年/23分/日本)
※日本語字幕付き上映



主人公である菊地信子さん(72歳)は宮城県岩沼市に住んでいる。信子さんは地震が起きた時、地元の人に身振り、津波が来るから逃げるように言われ、避難した。その後、津波が来て家が流された。もし、地元の人が信子さんに伝えなかったら、信子さん夫婦は津波にのまれ、亡くなっていたかもしれない。取材中に今村監督も震度6の余震を経験し、情報が得られない恐怖を感じた。命と安全に関わる情報に格差があってはならない。避難所から仮設住宅に移った信子さんの1年間を通して、ろう者がぶつかる様々な壁を取材したドキュメンタリー。

上映後監督トークショー開催 ※トークショーは手話で行われます。音声日本語への通訳があります。

ゲスト:今村彩子



名古屋出身/Studio AYA代表。
愛知県立豊橋高等学校高等部卒業/愛知教育大学教育学部卒業。
大学在籍中にカルフォルニア州立大学ノースリッジ校に留学し、映画制作・アメリカ手話を学ぶ。現在、名古屋学院大学・愛知学院大学で講師をする一方、ドキュメンタリー映画制作で国内だけでなく、アメリカやカナダ、韓国など海外にも取材に行く。東日本大震災直後、宮城に向かい、被災ろう者を取材する。全国各地で講演活動もこなしている。

17:30～

『相馬看花 第一部 奪われた土地の記憶』

監督:松林要樹 (2011年/109分/日本)



©松林要樹

東京電力福島第一原子力発電所から20キロ圏内にある南相馬市原町区江井地区。
2011年4月3日、津波と放射能汚染と強制退去で様変わりしたこの地域へ、松林要樹は救援物資を携えて向かった。山形国際ドキュメンタリー映画祭2011で本作が上映されると、会場は笑いと涙につつまれた。逆境に立ち向かう者同士が交わすユーモア。いつの世もかわらぬ男女の機微。土地を、自由を奪われた人々の背景で咲き誇る桜の花。いくつもの美しい映画的な瞬間を湛えながら『相馬看花』は、原発事故によって奪われた土地の記憶へと迫っていく。

東日本大震災からもうすぐ二年。

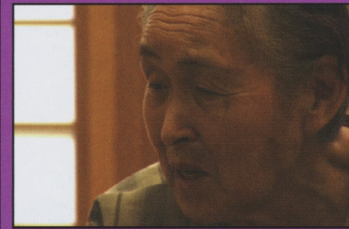
メディアによる報道がしだいに減っていく中、震災、そして福島原発の事故は今もなお多くの人々の生活に大きな影響を与えています。被災地復興を支援するため、私たちに何ができるのか。今回はそのひとつの試みとして、被災地から聞こえてくる“音”、そして「3.11後」を生きる人々の“声”をキーワードに、特集上映をおこないます。監督たちによるトークショーも開催! 皆さまのご来場をお待ちしています。

2/17 (日)

13:00～

『なみのおと』

監督:濱口竜介、酒井耕 (2011年/142分/日本)



津波の被害を受けた三陸沿岸部に暮らす人々の「対話」を撮り続けたドキュメンタリー映像作品。姉妹、夫婦、消防団仲間など親しいもの同士が、震災について見つめ合い語り合う“口承記録”の形がとられている。互いに向き合い対話する事は震災そのものに向き合うことでもあるのかもしれない。被災地の悲惨な映像ではなく、対話から生成される人々の「感情」を映像に残すことで、後世に震災の記憶を伝えようとする試み。若い監督2人も互いに対話を重ねながら撮影を進めた。

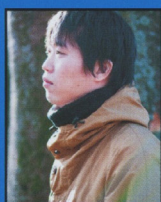
上映後監督トークショー開催

ゲスト:濱口竜介



1978年神奈川県生まれ。東京大学文学部大学卒。卒業後、商業映画、TV番組制作の現場で助監督として活動する。
2006年、東京藝術大学大学院映像研究科映画専攻監督領域に入学。修了制作として制作された長編映画『PASSION』(2008)は、2008年度のサン・セバスチャン国際映画祭と東京フィルメックスのコンペ部門に入選。チェコのカルロヴィヴァリ国際映画祭にも正式招待され、高い評価を得る。

ゲスト:酒井耕



1979年長野県生まれ。東京農科大学卒。在学中に、自筆脚本による短編から中編作品を監督する。卒業後、社会人として働いた後、2005年に東京藝術大学大学院映像研究科監督領域に入学。黒沢清、北野武に師事し、『愛の星』、田辺聖子原作短編活劇集より「ホーム スイート ホーム」、修了制作作品「CREEP」などを監督。課程修了する。現在は、フリーとして活動中。

『槌音』

16:30～

上映後監督トークショー開催

監督:大久保愉伊 (2011年/23分/日本)



故郷の岩手県大槌町が被災、家族も被害に見舞われた監督が、津波に流されることを免れた震災前の貴重な映像を編み込んで綴った詩。山形国際ドキュメンタリー映画祭2011正式上映作品。「町についた時、涙も出ませんでした。なぜなら自分の生まれ育った町とは違う土地を見ているかの様だったからです」。ひたすら町を歩き、スマートフォンの動画機能で記録した風景が見る者の胸に迫る。



ゲスト:大久保愉伊

1986年岩手県大槌町生まれ。
成城大学文芸学部芸術学科入学とともに映画研究部に入部。在学中に監督した「海に來れ- 若人狂想曲-」が、2008年下北沢トリウッドにて2週間ロードショー公開される。震災後製作した短編ドキュメンタリー「槌音」がロードショー公開される(石巻の震災ドキュメンタリー「大津波のあとに」と併映)。現在、故郷大槌町の過去/現在/未来を見つめた記録映画「面影地図-大槌の記録-」を2013年春完成目標に編集集中。

『核の傷 肥田舜太郎医師と内部被曝』

監督:マーク・プティジャン (2006年/53分/フランス)

自身の被曝体験を原点に、戦後66年間、被曝者治療と核廃絶運動に献身し、内部被曝の実相を訴え続ける現在94歳の肥田舜太郎医師の歩みを追ったドキュメンタリー作品。2006年にフランス人のマーク・プティジャン監督が描いた本作は、日米両政府が被曝者の実態を隠してきたことを明らかにし、原爆投下から68年経ち、福島原発事故が起こった後でも、日本政府の対応がなんら変わっていないことを訴える。肥田医師の講演のエッセンスを記録した『311以降を生きる:肥田舜太郎医師講演より』(2012年/27分/日本)を同時上映。

17:30～

